

基礎研の修了論文と私

田中與念子

1 基礎研と私の出会い

基礎研に私が出会った時、私は生活と健康を守る会の専従活動家だった。就職にあたっては、運動を続けたいということと、社会福祉をやっていききたいという二つの思いを実現できるだろうと、いくつか勧められた民主団体の中から選んだ。

就職後も学び続けたいとの思いを持っていたのでまず「労働学校」に参加した。2つのコースに参加したが、労働学校で学ぶ内容は「そんなことぐらい知っているよ」というようなことばかり。それで事務局に「もう少し突っ込んだ内容にしてほしい」とお話ししたところ、「労働学校は高卒向けなので、内容はこの程度です」と言われた。労働学校で知り合った新聞社勤務の方のお誘いで某国立大学の社研等にも参加したりしていたが、なかなか落ち着いて学習を深める場がないという状況だった。

そんな時に、基礎研が年に1回だけだしていた赤旗新聞で夜間通信研究科の募集を見つけ、京都の第2学科、自治体論学科に入った。自治体論学科は故柳瀬先生や小沢現理事長等がおられ、また自治体労働者を中心に福祉関係者もおられた。

2 基礎研の修了論文にむけて

基礎研に入り、資本論やその他の文献を読む・読まなければならない環境ができた。専従生活は忙しく、神戸から京都まで来るのがやっと・・・という状況だった。それでもゼミに向けて本を読まなければいけないということには大きな意味があったと思う。

修了論文「低所得者層の発達保障—生健会活動を中心として」を規定通りの2年間で書いた。修了論文作成に向けて、コメントを頂いた武元さんたちにも相談した。日本社会は臨調行革が始まり、生活保護では有名な123号通達が出され、引き締めがされはじめていた。生健会の中でもそれまでの組織問題がいろいろな形で出ていた。当時まだ私は、20歳代前半でした。生健会の全国交流集会等に行くとひとときわ若い私を「海千山千の方たちと頑張っている」と評価してくださったり、心配してくださったりする方もたくさんいた。私が生健会の専従になった時に兵庫県では私を含めて4人の専従だったが、その後、3人が辞めた。また、私が在職中に交流のあった他県の30歳代の男性専従活動家の方が自殺するといったこともあった。そのような中であって、組織内において、私は困難な状況を話すことはできないでいた。

基礎研は生健会のことも少しはわかり、高い視点に立って考えることのできる方にお話しできることにはとても意味があったと思っている。困難な状況を話すことで、自分自身が問題の整理をできたと思う。低所得者の問題をじっくり考えて修了論文を書くことができた。自分の頭でじっくり考えることからでた結論は、自分の中での確信となり、その後の活

動にも影響を与えたと思っている。

「民主」という名のところも実際、なかなか問題を回りに話すこともできないところで、時には精神疾患を患う人が出たり、自殺者も出したりしているように思う。私は自分で問題を整理できる癖ができた意味は大きかったと思っている。その後の人生を考えると、問題を整理して、学習会活動（講師活動）を行ったり、記事（新聞等の編集長）を書いたりすることができたし、あまり悩むことなく行動ができたことが精神疾患を患うこともなく過ごせたことだと思っている。生健会の活動から離れることを私は選択したが、問題をしっかり整理できていたことが、その後も患者さんにケースワーカーとして向き合ったり、ホームレス支援を行ったりすることに繋がったと思っている。

3 日本社会の変節と低所得者の運動

生健会の専従を辞め、基礎研の専従等を経て、1989年3月から大阪の医療生協で働いていた。大阪では新聞の編集長で記事を書いたり、ボランティアを組織したりしていました。京都でのつながりを生かして基礎研からも成瀬先生に講演に来ていただいたりもした。1992年9月に北九州市の民医連で働いてほしいという話があった。その民医連は1992年8月に公認会計士が入り、不正も明らかになり、倒産寸前状態で、何よりも民医連でありながら、1980年代に労働組合が分裂するようなところだった。当時、私は1歳と5か月の二人の子どもをかかえ、持ち家も買って6か月、とてもじゃないけれど労働組合が分裂するようなところでうまく立ち回る等できないと思って、当初はお断りしていた。しかし、民医連をつぶしてはいけないということで決意して転職することにした。

1993年6月から法人の基幹病院でケースワーカーとして勤務してみると、たくさんの無保険、資格証明（国保の資格はあるが、保険料未納等により保険証が交付されていない）の方が大量にいることを実感した。すぐに調べてみると当時はまだ全国的に多くなかった資格証明が他県とはけた違いに多いことなどがわかった。私が生健会の専従をしていた時代に福岡県は全国の他府県とは桁違いに生活保護受給者が多い自治体だった。多くの方が急に豊かになったわけでもないのに生活保護を打ち切られ、国民健康保険料も支払えず資格証明や無保険状態になっていた。

生活保護の打ち切りは進み、全国水準に近づき、弾圧は第4コーナーを回り終え、ゴール近いという状況だった。打ち切りの酷さは、入院中に生活保護を切られ、事務からどうにかしてほしいと連絡を受けるものもあった。1980年代後半は全国的に生活保護の打ち切りが進んだが、私が生健会の専従をしていた頃、全国平均とは桁違いに突出して高い保護水準だった福岡県に嵐のように弾圧があったのだと実感した。

その嵐の中、運動の中心にいなければならなかった民医連において、労働組合が分裂、「資金ショート」、相次ぐ病棟閉鎖・・・という事態だった。当時の北九州市は民主勢力が分裂とんでもないような状態だったと聞いている。民主勢力がまともに闘える状態でない中、弾圧は起こっていたと推察される。

私はこのような中、ケースワーカーとして個別事案に取り組むと共に、再建した民医連友の会の広報誌も担当し、国保の問題等を記事にしてきた。また、国保の問題や介護保険の問題等を民医連友の会や地域諸団体の学習会講師で市民に伝えてきた。また、看護学校で社会福祉の授業を担ったりもした。

記事として書くことや学習会講師、ホームレス支援等を通して多くの発信をしてきた。

4 基礎研の修了論文コメントとその後の人生

基礎研の修了論文のコメントは小沢修司さん、豊田裕子さん、武元勲さんの3人の方からいただいた。小沢さんは基礎研の現理事長をされている。小沢さんとは当時そんなに違いを感じていたわけではないが、現在では社会保障についての考え方を異にすることになっていると思っている。私は低所得者層の発達保障を、1 労働権・生活権の保障、2 社会的条件整備、3 組織化としている。その中で労働権に対する考え方の相違が小沢さんとの違いで大きいのではないだろうか、今考えている。

豊田裕子さんは社会福祉を専門にされており、別の福祉の研究会でも一緒だった。豊田さんは1980年代後半に福岡県立大学に教員として就職された。「関西に戻りたい」とよくお手紙もいただいていた。私と豊田さんは、私が大阪に就職してしばらく連絡が途絶えていた。1993年6月、福岡に行ったらすぐに「知ってる・・・豊田裕子さん自殺したのよ」と知らされた。びっくりして私は言葉も出なかった。その後、福岡で働くうちに、低所得者の問題を研究している人間に福岡での1980年代後半はどんなに大変なことだったのか・・・と実感させられた。豊田裕子の分も私は頑張ろうと決意をした。

武元勲さんとは京都に戻ってきてから福祉の研究会で再会した。武元さんは、基礎研時代は行政のケースワーカーを経て行政の幹部になっておられた。学生時代には、自治会活動でストを決行して退学処分になり、大学に入り直して社会福祉の道に進まれたことなど、不屈に頑張ってきたことを聞いた。

40年近く前に基礎研で社会保障について議論してきたこの4人をみても、研究し、闘っていくことの厳しさが伺えるのではないだろうか。

基礎研の修了論文を書いて、40年近くがたった。その間、毎日忙しく闘い、記事を書き、学習会を組織し、低所得者等を支援してきた。歴史を創ってきたのだと自負している。闘いの渦中にいたからこそわかった事実がいっぱいある。それを今からまとめていくこと、論文を書くことが私の使命でもあると思っている。低所得者層の発達保障パート2、日本の低所得者層の状態、医療の側面からも医師労働の働き方改革等、医療問題をもっと深めたい。自分の労働を客観的に見つめ、考える力をつけたことが、基礎研の「働きつつ学び研究する」力だったかと私は思っている。この力を元にこれから人生の終盤に向けてまとめの作業をしていきたい。